

私の写生地

風景にとらわれて訪れた各地

会員 湯浅迪哉



第18回回展(1986年) 冬の日

「冬の日」

油絵を描き始めたのは町の絵画教室へ娘を連れて行く様になつてからのことです。昭和五十

年頃、すっかり自分がはまってしまいました。

車の助手席を取りはずし、販売用のハイ・エースは快適な動くアトリエに変身した。

講師の先生が示現会員だつた縁で示現会に入会。佳作賞、示現会賞、日展入選と、夢のごとく通り過ぎていった。

モチーフは仕事で通う道路沿いにある古びた舟小屋である。中には朽ちかけた小舟や漁具が息をひそめて埋もれていた。タコ壺や浮き玉は近くの海岸の漂着物から拾つてきた。ランプは古道具屋を歩き回り二十ヶぐらい集めた。

私の絵の一番の友となりいつも存在するようになる。いつの間にか五十年が過ぎていた。

「知床岬」

妻の旅行好きが幸いした。夏休み、正月休み等二泊か、三泊の旅で二人で交代に運転をしながら北は北海道、南は沖縄(むろん遠くはツアーなどで)行ったところを写生した。車の中からの走り描きであった。

そんなスケッチブックは百冊を超えている。なかでも中国の桂林漓江くだりはジャバラになった六メートルの長さのスケッチが圧巻である。

知床の絵は遊覧船の中からのスケッチを作品に仕上げたものが、半島が怪獣の顔になっていた。

おもしろいのでそのまま示現会展に出した。

その後一、二年して遊覧船が事故をおこして沈没していた。複雑な感慨深い作品である。



第74回示現会展 知床岬

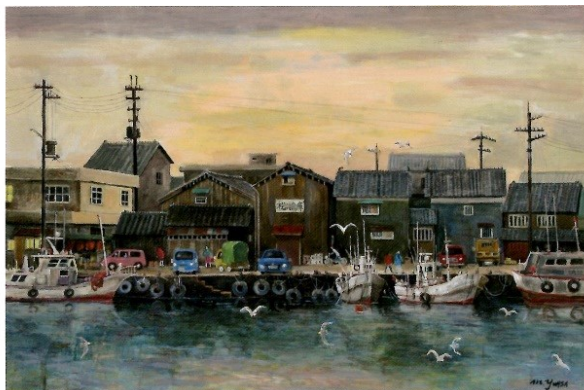
「港町夕景」

私の住む若狭地方の中心である小浜市は、古代から日本海の屈指の要港として栄え、大陸文化との連がりは深く、「海のある奈良」と言われる程名刹が多く、有名な「奈良のお水取り」の行事は、小浜が先にお水を送ります。

日本に初めて象がきた土地でもあります。陸上げされた物資は鯖街道によって京都、奈良等に運ばれました。今では日本中の田舎町がそうであるように、すっかり廃れ、賑わいのない町になってしまいました。

この絵は小浜氏の旧倉庫街の夕景で風情のある景色だったものです。

残念ながらなくなってしまいました。新しい町が出来、古い町がなくなって行く、世の常とはいえ、あまりにも寂しいものです。



第 67 回示現会展 港町夕景

「峠の秋」

木の芽峠は福井県を越前と若狭に分ける峠であります。この一帯は歴史的にも非常に重要な地で、かの有名な織田信長の朝倉攻めの時に、浅井長政の裏切りによって窮地に陥りきわどい撤退を余儀なくされたことで有名です。

この峠の茶屋は十年ほど前に行った時には、まだ人が住んでお

り、声を掛けると中に入れて下さった。

お茶を頂いた。中は囲炉裏がありいかにも古い雰囲気がありました。

この峠は義経が通り、新田義貞が通り、道元も通った道。

この住人は平家の末裔とか。犬五匹と一人で住んでいた



70周年記念示現会展 峠の秋

「春一番」

北陸の冬は寒くて、薄暗くうとうとういい日が続く。

若狭地方は北陸とは言え越前地方の様な厳しい寒さとはいえないがやはり光がまぶしい春が待ち遠しい。

この作品はそんな気分で描いた作品である。残り少ない寒さを含んだ嵐が過ぎ、凍りついた雪が舟小屋のあちこちにこびりついている、こごえる様な冷たい嵐の中に、一瞬春が感じられる。

漁師達の春を待つ心情を風の中に表現したくなり、太い絵の具筆がなかったので地面を掃除するホウキに絵の具をつけて画面を張りとはしました。



75周年記念示現会賞 春・一番